

2020年横浜ナザレン教会・降誕節第一主日礼拝  
「私達の冒険」ルカによる福音書第19章28節から38節

【聖書】

ルカによる福音書 19:28 イエスはこのように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。29 そして、「オリーブ畑」と呼ばれる山のふもとにあるベトファゲとベタニアに近づいたとき、二人の弟子を使いに出そうとして、30 言われた。「向こうの村へ行きなさい。そこに入ると、まだだれも乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどこいて、引いて来なさい。31 もし、だれかが、『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい。」32 使いに出された者たちが出かけて行くと、言われたとおりであった。33 ろばの子をほどこいていると、その持ち主たちが、「なぜ、子ろばをほどくのか」と言った。34 二人は、「主がお入り用なのです」と言った。35 そして、子ろばをイエスのところに引いて来て、その上に自分の服をかけ、イエスをお乗せした。36 イエスが進んで行かれると、人々は自分の服を道に敷いた。37 イエスがオリーブ山の下り坂にさしかかられたとき、弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇跡のことで喜び、声高らかに神を賛美し始めた。38 「主の名によって来られる方、王に、／祝福があるように。天には平和、／いと高きところには栄光。」

1 2020年最後の礼拝

今日は2020年最後の礼拝です。新型コロナウイルス COVID-19 の感染爆発が世界、日本、そして私達の住む横浜、東京の町を覆っています。そんな中であって、2020年の毎週の日曜日、欠かさずに神を礼拝し続ける事ができました。ひとえに神の憐みゆえだと、感謝し、み名を賛美しています。そして、今朝も今年最後の礼拝にふさわしい聖書の言葉が与えられました。

2 王としてエルサレム入城

主イエスのエルサレムへの旅も終わりに近づいています。エリコの近くで盲人の目を開いた主。エリコの町に入ると、大木のイチジク桑の葉影に徴税人頭ザアカイを見いだし仰います。「ザアカイ、下りてきなさい。わたしは今日あなたの所に泊まる事になっている」。そして彼の生き方の向きを、この世の富から、天の御神へと180度変える回心へと導きます。このような様子を見聞きした人々は、このイエスという方がエルサレムに入られれば今までにない素晴らしい神の国が打ち立てられるに違いないと、有頂天です。それで主は、ご自身が天の御神の許に帰り、再びこの地上にやって来るという事なくして神の国は完成しない、という事を譬えを用いて話されました。その後、28節「イエスは

このように話してから、先に立って進み、エルサレムに上って行かれた。」のです。イエス様はエリコを後にし、巡礼団の先頭に立ってエルサレムへ続く山道を登られたようです。それは、今日の聖書箇所からかなり遡って9：51「イエスは天に上げられる時期が近付くと、エルサレムに向かう決意を固められた」という言葉で始まった長い旅が終わろうとしていました。そして、主イエスは、神の都エルサレムに、今まで現れたことのない「真の王」として入城しようとされます。

エルサレムという都は、数々の支配者を外から迎え入れてきました。古くはアッシリア、バビロニア、ペルシャ、シリア。主イエスの時代はローマ帝国の直轄地でした。ユダヤの支配権を勝ち取った王や将軍たちは皆、華やかな凱旋行列を整えてエルサレムへと入城して行きました。立派な武器を持った規律正しい大勢の兵士達が行進する中、ひときわきらびやかな鎧に身を包み、雄々しい軍馬にまたがって勝利者たる王や将軍が行う凱旋パレードを、エルサレム市民は幾度も目にしていた事でしょう。しかし、主イエス一行の行進は、そんな華々しいパレードとは全く異なるものでした。勝利の王である主イエスが乗るのは、軍馬ではなく、ろばです。それも子供のろば。旧約聖書ゼカリヤ書9：9では、救い主、メシアがエルサレムに来られる時の様子が次のように預言されているからです。「娘シオンよ、大いに踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声をあげよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者。高ぶることなく、ろばに乗って来る。雌ろばの子であるろばに乗って。」シオンとは、エルサレム神殿がある丘の名前です。神殿の丘やエルサレムの街自体がまるで躍っているかのように、喜び溢れ歓呼の声で満たされる様子が描かれています。地を揺り動かすような歓喜の中心は子ロバに乗った救い主。馬は戦争にも使われますが、ろばは、もっぱら荷物や人を運ぶ事に使われる人々の生活に欠かせない親しみ深い動物でした。救い主、メシアは、軍馬にまたがる戦いの王ではなく、ろばに乗る平和の王だということです。子ロバに乗っている平和の王。

ですが、今日の聖書の入城行進の真ん中にいる人は、長旅でくたびれた衣をまとった男。偉そうでも強そうでも豊そうでもありません。彼を囲む人々も同様に一見、貧しい巡礼者達です。人の目には貧しく見えるこの行進の奥には、人間には図り知る事のできない深い神の救いの計画が息づいています。その証拠に、2000年近く経った今、きらびやかで勇壮に見えた王や将軍達の凱旋行進はすべて人々の記憶から消え去っていますが、ただ、主イエスの入城行進は、ずっと語り伝えられています。聖書は事ある毎に、「人の目に見える表面的な事に惑わされず、その奥にある本質を見なさい」と私達に語っているようです。

### 3 主がお入り用です

その入城行進の準備の為に、主は子ロバを用意するように弟子達に命じます。そこで印象的なのは、何といたっても「主がお入り用なのです」という言葉でしょう。この福音書をまとめたルカもそうだったようです。マタイやマルコの福音書にも同じくロバを調達した記事がありますが、「主がお入り用です」という言葉は、一回しか出てきません。しかし、ルカは、主イエスの指示と、弟子達が主の指示に従い実際に語る場面の二か所で「主がお入り用です。」を記しています。それは、主イエス一行が、オリーブ山の東側の麓ベトファゲ村とベタニア村の近くまでやってきた時でした。エルサレムまでは徒歩で六時間ほど、オリーブ山と呼ばれる丘ひとつ超えれば、もうエルサレム、という地点です。そこで主イエスは弟子達の中で二人を選び、向こうの村まで遣いに出します。

ですが、主の指示は、かなり無茶に思えます。繋がれている他人の子ロバを連れて来る時、誰かに「なぜほどくのか」と言われたら、「主がお入り用です」と答えなさい、というのですから。2000年後の教会に生きている私達は、「主イエス」と繰り返し言いますので、「主」と言えば「イエスさま」の事だと思い、ここを「主イエスがお入り用なのです」と読んでしまうでしょう。ですが、「主」と訳されているギリシャ語は、「持ち主」「主人」という意味の単語であり、しかも「彼の」つまり「子ロバの」という言葉もついています。「主がお入り用なのです」を直訳すれば、「彼の持ち主が彼を必要としているのです」となります。本当にそんな事言って大丈夫なのでしょう。ロバの持ち主がこの答に激怒して「何だって？これは私のロバだぞ。私が嘘をついているとでもいうのか。貸してなどやるものか！帰れ！」と怒られるのがオチのようです。とてもすんなりと子ロバを貸してもらえとは思えない、寧ろこう言った方が遙かにスムーズに貸してくれそうです。「私どもの主人があなた様の子ロバをお借りしたいと申しております。用が終わりましたら、必ずお返しにあげますので、どうかひと時お貸してください」二人の弟子だってそう思った筈です。それに城壁もない小さな村です、そんなに都合よく誰も乗ったことがないような子ロバが見つかるとも思えません。

半信半疑のまま不安な気持ちで、出かけていく二人。しかし、いざ行ってみると、主の言葉そのままに、誰も乗った事がないと一目でわかるような子ロバが繋がれていました。その時、この二人の弟子達は、「誰かから何か言われたら、とりあえず、主のお言葉通りに答えてみよう」と決心したのだと思います。そして、主の言葉をそのまま、ロバの持ち主達に、伝える事ができました。「この子ロバの持ち主が彼を必要としています。」すると、どうでしょうか、ロバの持ち主達はすんなりと子ロバを渡してくれました。「主の言葉の力はなんてすごい

んだ!」、二人が自分勝手に変えたりせずにそのままを伝えたからこそ、彼らは主イエスの言葉の力を知る事ができました。ある説教者は、この二人の弟子の経験を、「**み言葉による冒険**」と語りました。主イエスの言葉だけを頼りに行う冒険です。

この冒険は二人の弟子だけに限ったものではありません。十二弟子のうちのペトロ達がガリラヤの漁師であった時、ただ「**深みに漕ぎ出して網を下ろしてみなさい**」という主イエスに対して、「夜通し漁をしてもだめでした。しかし、お言葉ですから」と、網を下ろしたという出来事もそうです。プロの漁師であるペトロ達がどう考えても魚など獲れる筈がない、という真昼間の湖ですが、ただ主イエスの言葉だから…と、彼らは沖に漕ぎ出し漁をしました。すると、船が沈みそうなほど大漁となりました。

また、主イエスはご自身の代理として「神の国が近づいた」と宣べ伝え、病める人々を癒すようにと、弟子達をイスラエルのほうぼうの町や村に二人一組で遣わしました。彼らは、主の言葉だけを信じ、殆ど何も持たずに見知らぬ町や村へと伝道の旅に出たのです。

弟子達の「み言葉の冒険」に通じる事を、森有正先生が国際基督教大学の新生に対して、「冒険と人生」という素晴らしい講演の中で話しておられます。この講演の中で森有正先生は、「学問する事も冒険であるし、人として生きる事も冒険なのだ」と言われました。ですが、「冒険というのは、自ら好んで行う力試しとは異なる」と仰います。高い山からスキーで滑降するとか、厳しい冬山に登ってみる、そういう事も悪くない、しかし、森先生は、「神を信じて生きる者、そして本当に人間として生きようとする者が行う冒険は、人生とは自分が造るものであると自負し、しかも危険を承知で自分の力を試しをしながら生きていくそのようなことではない」と言われるのです。「人生の冒険とは、神の言葉、主イエスの言葉を信じて、先が見えない人生の海に乗り出すことなのだ」と仰る。その通りだと思います。本当の人生を生きたいと心から思います。

しかし何故、そんな先が見えない処へと乗り出していけるのでしょうか。「**主がお入り用だから**」です。つまり、「彼の持ち主が彼を必要としているから」なのです。この子ロバもまた、私達キリスト者を示しているのだと思います。私達もまた、私達自身や誰か他の人間のものではなく、イエス・キリスト所有のものだからです。

今から470年ほど前、ドイツのハイデルベルクという街で造られた「ハイデルベルク信仰問答」というものがあります。ヨーロッパでは、古くから「信仰問答」という形式の書物を通じて子どもや青少年たちに教会の教えをかみ砕いて伝えてきました。様々な問いとその答えが集めてある、所謂Q&A集。教会の教義を分かりやすく述べています。ハイデルベルク信仰問答は、代表的な信

仰問答集であり、宗教改革期の混乱した教会で、子どもばかりでなく大人の教育にも広く用いられました。今でも多くの信仰者に愛されています。特に、最初の間答は本当に素晴らしいものです。「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」「生きるにも死ぬにも、あなたのただ一つの慰めは何ですか。」この問いは「生きる時にも死ぬ時にも唯一の勇気を与えるものは何か？」「生きる時にも死ぬ時にも唯一の励ましは何か？」と読んでいいそうです。その答えはかなり長いものですが、要点は「わたしがわたし自身のもではなく、体も魂も、生きるにも死ぬにも、わたしの真実な救い主、イエス・キリストのものであることです。」私の全存在は、生きる時も死ぬ時も、全てキリストのもの、それが全ての勇気の源、全ての力の根源です。天の御神は、神の独り子という値高き宝を、この私のために犠牲にしてくださった、主はそれに従い抜き、ご自身が血を流してくださった。従って、既に、この私は自分のものではない、御子の十字架の血によって神に買い取られ、所有権はイエス・キリストに移っている。だからこそ、もう不確かで不十分な知識と力しかない自分に悩む事はないのです。自分の罪に、自分の憎しみ、悲しみ、痛みに、縛られる必要はない、神の子の自由、敵をも愛する自由に生きる事ができる、しかも、それは生きる時だけではない、親しい人々と引き離されて、一人孤独に死へ赴く時でさえ、「自分は既にキリストの者だ」という事が、死の恐怖に打ち勝つ慰め、勇気、励ましを一人一人に与えると、聖書は語るのです。

主イエスの十字架によって、私達を罪と死に縛りつけていた綱はほどかれて、本当の持ち主のもとへ、救い主のもとへと連れて行かれた時、私達は本来の場所を得、そして本来の自分の人生が始まるのだと思います。「あなたの真の持ち主が、あなたを必要としている。」人生です。だから、「み言葉による冒険」は、私達の本当の持ち主・主イエスが共にいてくださる冒険です。私自身のこれまでの歳月をふりかえると、本当にそうだなあ〜と思わされます。主の言葉に従いきれない頑固さを主の御前に投げ捨て、ひたすら祈りつつ主の言葉だけにより頼んで進む時、必ず道が開けるという経験をする事ができるのは、何ものにも代えがたい信仰者の恵みだと思います。「ああ、父なる神も主なるキリストも真に生きて働いて、私達を平和へと導いてくださる！」と、自分をこよなく愛してくださるキリスト・イエスのものとされている事が実感できて、父なる御神を賛美せずにはおられないからです。

#### 4 天には平和

弟子達も同じでした。彼らはオリーブ山の下り坂にかかった時に賛美し始めたとあります。先程見たように、オリーブ山は、エルサレムの東側にある丘であり、オリーブ山を越えるとエルサレム神殿のあるシオンの丘が見えてくるそ

うです。やがてエルサレム神殿の一角が西側に見えて来ようか、という所に来た時、彼らは声高らかに賛美し始めます。「遂にエルサレムだ！」そういう思いが湧いた時、彼らは、自分達が経験した数々の「み言葉の冒険」の恵みが脳裏に甦ってきたのだと思います。主イエスが神の力をお持ちであり、その言葉は神の権威を持ち、悪霊も従わずにおれない事、しかし、その力で多くの人々、特に社会から疎外された人、見捨てられた人、神の御前からさまよい出ている人々を捜し求め癒される主、真の救い主。こんな素晴らしい方を王に戴く王国が現れる、なんとという喜び！彼らは、声高らかに神を賛美せずにはいられなかったのだと思います。

勿論、弟子達は、これから入るエルサレムで起こる事を理解はしていません。彼らはまさか救い主ご自身が十字架について、全ての人をご自身の国に招き、平和の王になろうとされているとは、予想だにできなかったでしょう。救い主がエルサレムで即位する玉座は、奴隷が死刑となる十字架であるとは、人間が考えられる事ではないからです。しかし、彼らは主イエスを真の救い主として賛美しました。全てを知っているわけではなく、いや時には殆ど何も知らないままに神に用いて頂く、それもまた、信仰者の人生だと言ってよいのではないのでしょうか。冒険の意味は、後から振り返って判る事の方が多いように思います。

人々は上着を脱いで子ロバに乗る主が行く先々に敷きました。旧約聖書の列王記下という書物の第九章にも同じような光景が描かれています。北イスラエル王国のイエフという人が、預言者エリシャの使者によって次の王に指名された時に、人々が上着を脱いで足元に敷きその上をイエフが歩きました。この事から、人々が上着を脱いで道に敷く、というのは、神に油を注がれて王となる者に対して、「あなたは、神が選ばれた我々の王です」と受け入れ、従順と尊敬の気持ちを表す象徴的な行為だと言われています。

そしてその時の賛美は「主の名によって来られる方、王に、祝福があるように。」で始まります。これは先程読み交わしました詩編 118 の 26 節の引用とされています。詩編 118 篇は、巡礼者達がエルサレムへやって来る時に歌われた賛歌の一つだそうです。弟子達は、エルサレムに入る巡礼者達が賛美するこの詩編の言葉に、「王に」と新たに付け加えて歌っています。弟子達の喜びが付け加えさせたのでしょうか。そして、弟子達の賛美は、「天には平和、いと高きところには栄光」と続きます。私達は先週のクリスマス礼拝で、これとよく似たフレーズを聴きました。天使の大軍が、クリスマスの夜の暗い野原の上空を埋め尽くして賛美した「いと高き所には栄光、神にあれ。地には平和、御心に適う人にあれ」(2:14)。まるでこのクリスマスの夜の天使の大軍と響き合うかのような弟子達の賛美です。しかし、今日の聖書では、「地には平和」ではなく「天には平和」。何故弟子達は、「天に平和」と賛美したのでしょうか。

矢内原忠雄先生は、次のように言います。「主イエスの往かれる所に平和が伴い、イエスのおられる所に平和も留まる。それはイエスご自身が平和そのものであるからだ。」主イエスは、やがてエルサレムで十字架の栄光をお受けになった後、甦って天に昇られます。その時、「天には平和」が実現すると矢内原先生は仰り、弟子達の口を通して、霊なる御神が主の昇天を語らせているようだと語ります。そして、「主イエスご自身が平和そのもの」だからこそ、主イエスを信じる者にとっては、地上でのみ言葉の冒険の日々にも平和があり、世を離れて天に召される日の冒険にも平和があります。平安と言った方がよいでしょう。私達の冒険にはキリストの平安がある、それは、私達は生きる時も死ぬ時もキリストのものだからです。そして、主が審き主として再び地上に来られる時、「地に平和」が完成されるのです。その時まで、私達は、見えないキリスト・イエス、霊なる御神と共に、平安のうちにみ言葉の冒険を続けます。

## 5 終わり

2020年も終わろうとしています。今年経験した主イエスの恵みを思い返し、私達の王なるキリストを賛美して、キリストの者として、2021年に待つみ言葉の冒険へと喜びをもって一步を踏み出す事ができますように、今疲れ果てて力をなくしているこの世の人々に、キリスト・イエスの慰めと励ましが豊かに届きますように、私達がキリストをお乗せしてその方々の所へと出ていく事ができますように祈り願います。